

文明開化と都市空間

—銀座煉瓦街を中心に—

城 野 充

Urban Spaces during the Westernization of the Meiji era : In the case of Ginza Brick Street

Mitsuru JOHNNO

はじめに

明治維新の指導者たちが欧米列強に対し文明の同等性を主張するため近代化に邁進したことは論を俟たない。本稿での関心の所在は、指導者たちのそうした意図のもと日本にも移転されたモダニティが、都市空間においてどのようなかたちで表象され、そして作動していったのかにある。このことを東京の都市空間、具体的には「文明開化の目抜き通り」銀座煉瓦街（1875～1923年）を中心に考察するなかで見えてきたものは、「モダニティ」が「土着」と出会うことで出現した「ハイブリッドモダン」であった。ここでは歴史的・経験的見地からの先行的な知見をもとに銀座煉瓦街に見られた「ハイブリッドモダン」を照射していくを試みる。

モダニティの環境化

日本の文化を雑種文化の典型であるとした加藤周一は、「近代日本と外部の世界との関係は、外部に対抗するために外部から学ぶというこの「対して」と「から」の逆説的で二重の関心の構造からはじまった」¹と論じている。

福沢諭吉に「実に嘉永年中、米人渡来の一挙は、あたかも我民心に火を点じたるが如く、一度び燃えてまたこれを止むべからざるものなり」²と言わしめた、ウェスタン・インパクトによ

¹ 加藤周一『雑種文化—日本の小さな希望—』講談社文庫、100頁

² 福沢諭吉『文明之概略』岩波文庫、1995/2013年、11頁

ってその幕が切って落とされることとなった日本の近代化は、その当初から、加藤の言う「逆説的で二重の関心の構造」によって歩むことを余儀なくされていたと言えよう。日米修好通商条約批准書を携えての1860年の遣米に始まり1871年の岩倉遣欧使節団に至るまで、幕末から明治初年にかけての欧米への使節団は、欧米に「対する」ために出発し、彼らに「対する」ためには彼ら「から」学ばざるを得ないとの強烈な思いを抱いて帰朝したのである。

このことは、明治政府の基本方針である「五箇条の御誓文」（1868年4月）においても明示されている。「広く会議を興し万機公論に決すべし」を第一条として始まる「御誓文」は、第四条で「旧来の陋習を破り、天地公道に基づくべし」、続く第五条で「智識を世界に求め、大いに皇基を振起すべし」と開化の方針を宣言する。つまり、それまでの伝統社会を陋習として斥け（旧習一洗）、これからは文明国から学ぶことによって、天皇を中心とした国民国家の基礎を築いていく旨の宣言である³。

約260年続いた徳川の時代を歴史の舞台から退場させ、明治の時代を舵取りすることとなった若き指導者たちが着手しなければならなかった課題は、欧米列強に互する「国民国家」を創出することにあった。この想像の共同体としての「国民国家」をいかに人々の間にイメージさせるのか。

ここにおいて重要な役割を果たしたのは「文明開化 civilization」というシンボルであった。明治日本が進むべき道として、この「文明開化」の立場を明確に表明し、世の中に定着させた人物こそが、幕末期に三度の洋行経験（1860, 1862, 1867年）をもつ唯一の日本人、福沢諭吉である⁴。「歴史を察するに、人生の始は莽昧にして、次第に文明開化に赴くものなり」⁵と、『西洋事情』の外編（1867年）で述べた福澤は、『文明論之概略』（1875年）において、次のように世界の文明段階を記述している。

今、世界の文明を論ずるに、欧羅巴諸国並に亜米利加の合衆国を以て最上の文明国と爲し、土耳其、支那、日本等、亜細亜の諸国を以て半開の国と称し、阿非利加及び澳太利亚等を目して野蛮の国といい、この名称を以て世界の通論となし、西洋諸国の人民、独り自ら文明を誇るのみならず、彼の半開野蛮の人民も、自らこの名称の誣いざるに服し、自ら半開野蛮の名に安んじて、敢えて自国の有様を誇り西洋諸国の右に出ると思う者なし⁶。

³ 井上勝生『幕末・維新』岩波新書、2006年、170頁。井上は第四条、第五条には、旧幕府は受け入れなかった欧米中心の「文明と未開」の見方に、新政府はみずから同調していることが表れているとする。これとの関連で言えば、前述の加藤周一の「対して」と「から」では、「西洋に対するために西洋から学ぶ」といった「西洋」「日本」の構図であるが、「対して」にはもうひとつ「旧幕府」がある。つまり「旧幕府」「伝統社会」に対するために文明国から智識を摂取という面である。

⁴ 山本義隆『近代日本一五〇年—近代科学技術総力戦体制の破綻—』岩波新書、2018年、8、18頁

⁵ 福澤諭吉『福澤諭吉著作集1 西洋事情』慶應義塾大学出版会、2002/2013年、94頁

⁶ 福澤前掲『文明之概略』25-26頁

このように、福澤は日本を文明発展の段階において半開の国と位置づけたうえで、ヨーロッパの文明を目的と定めて進路をとる必要性を説く⁷。丸山真男によれば、こうした文明の発展区分は、西欧の進歩思想のなかの世界史の発展段階という考えで、それは18世紀末からの一般的観念であった⁸。福澤が定着させた「文明開化」は、西洋文明が最も高い発達段階にあるとする西洋の進歩史観を下敷きにしたひとつのイデオロギーであることは明白である。しかし、ペリー来航によって点じられた火は、福澤による「文明開化」というシンボルを得て、さらにその勢いを増していった。そして、日本の近代化は「欧米＝文明国、日本＝半開」意識が深く刻印された「文明開化」「文明化」によって表象されていくことになる。

「長い19世紀」(1780～1914)に展開された近代化の特徴を、外見上の統一化と内面での複雑化の同時進行にあると論じているC・A・ベイリは、「時代に遅れないよう」と願望を強く抱くことが近代性(modernity)であり、それは模倣と借用のプロセスだと主張する⁹。彼のこのような近代性の理解に従えば、シンボルとなった「文明開化」、そして「御誓文」は、まさしく「時代に遅れないよう」といった願望の表出であった。その意味で、これらはモダニティを移転し、環境化する始発となったと言えるだろう。とりわけ「文明開化」が当時の流行語として、新生日本においてモダニティが移転していくにあたって果たした役割は大である。

上記において確認したように、欧米列強を文明国とし、その比較において日本を半開とした「文明開化」と「御誓文」によって、まずは「公の場」でモダニティが環境化していくことは、とりもなおさず西洋の文化を「模倣」、「借用」していくプロセスであったことを意味している。マクロ面での19世紀という文脈において、こうしてモダニティは「模倣」と「借用」の形をとって日本にも移転されていくのであり、移転によって見られるようになる現象のひとつにグローバルな統一化がある。

モダニティの表象

ベイリはモダニティがもたらすグローバルな変化としての外見上の統一性が顕著に表出された例として、衣服や身体作法といった「身体慣習」の統一性を挙げる¹⁰。

衣服の面での統一の進行についてベイリは、「公の場で同じように自己表現する人々の切実

⁷ 福澤前掲『文明之概略』、29頁

⁸ 丸山真男、加藤周一『翻訳と日本の近代』岩波新書、1998年、137-138頁。C.A.ベイリは、徳川の体制のイメージを貶めるために、ここで丸山が指摘した欧米人の歴史像を1870年代の日本の改革者たちは共有していたと述べている。C.A.ベイリ（(平田、吉田、細川訳)『近代世界の誕生—グローバルな連関と比較 1780-1914』(上)、名古屋大学出版会、2018年、103頁

⁹ 同上書、18頁

¹⁰ ベイリ前掲書、18-25頁

な必要性に訴えるものだった」¹¹と言う。また、衣服のグローバル・ヒストリーの研究者であるR・ロスも、人々は「近代的な国際社会の一員として行動し、近代人を自任し、ひいては他人にとって重要であり、自分自身にとってもこの戦略が重要であると信じるようになる」が、その表明方法においては「衣服はつねに最も目立つ媒体のひとつ」¹²であると、衣服のもつメディア/記号性に言及している。

日本にあっては、この衣服面でのグローバルな統一性への第一歩は1872年の服制規定となって表れた。「文明開化」＝「モダニティ」は「身体慣習」面でこのようにして表象されていくことになる。市中の警察官の洋装化は1874年のことである。1872年に制定された高級官吏の洋装化と異なり、警察官の洋装化は市民が日常的に「文明開化」のしるしに触れるという点で大きな意味をもっている。それは「文明開化＝欧化」の尖兵として下級官吏を位置づけようとの意図であった¹³。

「文明開化」の表象化は衣服にとどまらない。前年の1871年には、「散髪脱刀勝手なるべし」との「散髪脱刀令」が太政官布告として出されている。身体のあり方にかかわる新たなモノである椅子の導入もやはり1871年のことで、官庁での使用が政令によって定められた¹⁴。また、身体をつつみ込む空間へと目を転ずれば、国が計画、建設した初めての西洋式建築が大阪の地にその姿を見せ（大阪造幣局、1871年）、翌1872年になると銀座煉瓦街計画が起工（竣工は1877年）されている。

このように「文明開化」は形象化、可視化されていくのであるが、明治初年の「文明開化」の可視化現象に批判的な目を向けていたのは福澤諭吉であった。福澤は前出の『文明論之概略』において、「文明には外に見わるる事物と内に存する精神と二様の区別あり」と、文明を外から見える「事物」と外からは見えない内なる「精神」の二種類に分別する。そして、採用することが容易な前者に比し、後者の獲得は困難であるが、国を文明国にしようと計画するなら難しい後者の方から取り組まねばならず、この順序を間違えてはならない、と説くのであった¹⁵。

福澤は続けて言う。「譬えば近来我国に行わるる西洋流の衣食住を以て文明の徴候と為すべきや。断髪男子に逢いてこれを文明の人というべきや。肉を喰う者を見てこれを開化の人と称すべきや。決して然るべからず」¹⁶と。人々の気風を一変することは極めて難しいことであり、一朝一夕の偶然によってできるものではない。それは政府の命令で強制できるものでもなけれ

¹¹ ベイリ前掲書、18頁

¹² ロバート・ロス（平田雅博訳）『洋服を着る近代一帝国の思惑と民族の選択』法政大学出版局、2016年、291頁

¹³ 松浦寿輝『明治の表象空間』新潮社、2014年、73頁

¹⁴ 『東京府志料』（1872年）によれば、1871年の一年で椅子が18,750脚が生産されているという。小泉和子『室内と家具の歴史』中公文庫、2005年、383頁を参照されたい。

¹⁵ 福澤前掲『文明之概略』29-30頁

¹⁶ 同上、30頁

ば、宗教の教えによって説かれるものでもない。「いわんや、僅かに衣食住等の物を改革して、外よりこれを導くべけんや」¹⁷。

以上のように福澤は、「文明の精神（気風）」を獲得することの困難性を強調しつつ、『文明之概略』執筆当時の「事物」先行の「文明開化」を戒めるのである。

ここで考えてみたいのは、「衣食住の改革によって気風は導けない」との福澤の見解である。もっとも、福澤も「事物」に表される「文明開化」を全面的に否定しているわけではない。だが、「事物」のもつ媒介性という視点は『文明論之概略』にはみられない。これとのかかわりで、ここで多木浩二を引いてみよう。西欧では真に近代化するはるか以前に、衣装によって近代を虚構のかたちで演じることによって、その適応条件をつくっていたと述べ、「衣装が先行して変わっていくことは、本質的には政治的かつ知的な次元の変革の一部」¹⁸であると、福澤のように「精神」と「事物」という二元論ではなく、衣装面での変化は精神面での変化ととらえている。同様に、思想史研究者の山室信一も『モダン語の世界へ』において、「髪型と服装の変化は、単に外見が変わるというだけでなく、感覚や言動など生きるスタイルまでを変化させるもの」¹⁹とその媒介性を強調している。社会学者・厚東洋輔が言うように「商品」(モノ)はモダン移転のメディアなのである²⁰。

環境化された「文明開化」「モダニティ」において、人々はその環境に相応しい演技かたが要請されるということである。果たして、「事物」、外形的なモノに媒介されることなく、環境となった「文明開化」を生きることができるのであろうか。明治初期の風俗面での「事物」の洋風化は、シンボル化され環境となったフィクションとしての「文明開化」において、好むと好まざるにかかわらず近代を演じようとする人々がたのみとする媒介物であったと言えるのではないか。グローバリゼーションとしての近代の特徴としてベイリが記述した「身体慣習」の統一性を考えるひとつの鍵は、この「近代を演じる」ことにあるように思われる。蘭学を通じて西洋文明の気風に接してきた知識人たちはともかく、市井の人々が「文明開化」という環境の理解は、モノを介しての身体感覚のレベルでなされるのではないだろうか。そもそも「文明開化」はイデオロギーであるからこそ、視覚的明瞭性によって人々に提示されることが必要であったのだ。さらに言えば、「身体慣習」のグローバルな統一化は、「その方が便利であるから」といった機能性のレベルで始動したのではないということである。それは、「近代」と遭遇した国の人々が、「近代を演じる」ために必要としたからであり、「機能性」はあくまでも事後に「発

¹⁷ 福澤前掲『文明之概略』、33頁

¹⁸ 多木浩二『天皇の肖像』岩波新書、1988年、45頁

¹⁹ 山室信一『モダン語の世界へ—流行語で探る近現代—』岩波新書、2021年、134-135頁

²⁰ 厚東洋輔『グローバリゼーション・インパクト—同時代認識のための社会学理論』ミネルヴァ書房、2011年、33頁

見」されたことに過ぎない。

ここまで見てきたように、人々にとって環境とされた「文明開化」にあって、「文明開化」はそのもとで演じられねばならないのである。そのためには、やはり外形的な、可視化された事物（舞台、道具）は不可欠と言えるだろう。「文明開化」はイメージ（視覚化）される必要があるということだ。「文明開化」は視覚化された表象群によって構成されることを通じて、その環境のもとに生きている、あるいは生きざるを得ないことを人々に実感させるものとなる。

さて、筆者はこれまでいくつかの拙稿で、日本の近代化において記号化された洋装がどのような意味作用をもたらしたのかを考察してきたところであるが、明治という時代の始まりとともに出現することとなった「文明開化の表象空間」を構成した、そのひとつが日本人の洋服姿であろう。この点については、本稿においてもこれまでに触れてきたところであるが、ここからは、「装い」とは身につけるもののみを指しているのではなく、「個人の装いはある大きな空間の設営の一部分」、「その空間との対応関係にあるもの」²¹という観点から、近代の（視覚化された）表象空間を記述したいと考える。

個人の装いを「大きな空間の設営の一部分」ととらえることによって前景化してくるものは、建造物や街路などの都市空間である。今和次郎の考現学によって描写されたその当時の衣装がわれわれの想像力をかき立てるのも²²、また、近年の原克の『サラリーマン物語』や『OL誕生物語』で描かれる登場人物たちのファッションが「生き生き」としたものとして我々の目に映るのも、まさに、彼ら彼女らの装いが都市空間の一部分として、その対応関係のなかでとらえられているからに他ならない。

近代の表象としての都市空間

明治維新後の「文明開化」のもとでの「国民国家」創出プロセスが進行していくなか、この国の街並みにも急速な変化がもたらされた。西洋建築と呼ばれる構造物が出現したのである。洋装と同様、この西洋建築の導入は国家による上からの近代化の一部として行われた。この西洋建築の出現を、建築家・日埜直彦は、これまでの日本近代建築史研究の知見を踏まえて、「いわゆる文明開花の漠然とした流れにのって西洋式建築が日本に定着したのでなく、強力な中央集権的国家の意思によって体系的に西洋式建築の導入が行われた」²³とし、その導入の特殊性を強調する。

²¹ 大丸弘、高橋晴子『日本人のすがたとくらし—明治・大正・昭和前期の身装』三元社、2016年、2頁

²² 例えば、今和次郎、吉田謙吉『モデルノロジオ「考現学」』春陽堂、1930。や今和次郎、吉田謙吉『考現学採集』建設社、1931。がある。

²³ 日埜直彦『日本近現代建築の歴史—明治維新から現代まで』講談社現代メチエ、2021年、42頁

では、なぜ国家の強力な意思によって西洋式建築が導入される必要があったのか。この問いに、日埜は、「国家が自らの近代化の基礎として、そしてとりわけ不平等条約との関係で日本が文明国である証しとして、西洋式建築の導入を必要とした。(略) 不平等条約改正が西洋式建築の動機となったのはそれほど長い期間のことではない。しかしすくなくとも鹿鳴館外交に象徴される初期においては、条約改正がもっとも強い動機だった。西洋式建築の導入によって条約改正が実現する、という当時の期待は今から考えれば奇妙に思えるが、そういう期待があればこそ西洋式建築の導入は強力に推進された」²⁴と、条約改正の実現をその理由に挙げている。

西洋式建築導入の動機に関するこうした記述はすでに日埜以前にもみられるもので、日本の建築史、風俗史研究の分野では一般に了解されていることのように思われる。たとえば、建築史家の藤森照信は、欧米並みの立法・司法など法制の不備とともに、対等のつきあいに相応しい文明の欠如を理由に条約改正に応じようとししない欧米列強からの日本に対する論難が、指導層に銀座煉瓦街や鹿鳴館の建設などを計画させるものとなったと述べているところである²⁵。

「対等な文明国である」ことを示すための西洋式建築の導入は、上からの洋服の導入と同じ論理であった。「近代」を突きつけられた後発の国々がそうであったように、わが国においても、特定の衣服は近代性を主張するレトリックとして使われた²⁶。明治の指導者たちは洋服の着用同様、西洋式建築や街路を出現させることによって文明国＝列強に対して、日本の近代性、「文明度」の同等を主張しようとしたのである。この「外」に向けての「文明」の主張は、同時に「内」に向けての江戸文明の否定でもある。つまり、西洋式建築の現出には、「文明＝近代」への接続と「未開＝封建」からの断絶双方の面を併せもっているということを見落とすべきではない。前項で述べた「環境となった文明開化」のもとで自らが演じることのできる外形的な表象空間の創出もこの「接続」と「断絶」とにかかわっている。

ともあれ、国家によって建設された最初の西洋式建築は大阪造幣局（造幣寮鑄造所、泉布観などは1871年）であった。この建築を監督したのが、欧化主義者の筆頭格として知られ、建築分野においては銀座煉瓦街計画や鹿鳴館、さらには日比谷官庁計画を主導した井上馨である²⁷。

岩倉使節団がサンフランシスコに向けて出航した翌1872年、いわゆる「お雇い外国人」のイギリス人T・ウォートルスの設計で「文明開化の目抜き通り」（陣内秀信）として銀座煉瓦街計画が始動する。同年8月に銀座一丁目から起工されたこのプロジェクトは、1874年2月には、街路の舗装も完了し、並木も植樹された煉瓦街として人々の前にその姿を現している。完工した

²⁴ 日埜 前掲書、58頁

²⁵ 藤森照信『明治の都市計画』岩波書店、1990年、265頁、300-301頁

²⁶ ロバート・ロス（平田雅博訳）『洋服を着る近代—帝国の思惑と民族の選択—』法政大学出版局、2016年、290頁

²⁷ 日埜 前掲書、51-53頁

²⁸ 藤森 前掲書、25-26頁

のは1877年のことであった²⁸。

藤森照信は、この銀座煉瓦街の実績として、街路計画では、歩車分離、並木、街灯という三つの内容を挙げ、近代の街路の祖型というにふさわしいものと評価する。また、建築計画の面では、全家屋の煉瓦造化、道幅に応じた規模、連屋化、歩廊設置、様式の統一が実績であるとする。歩廊（アーケード）が設置された商店街は、ヨーロッパ各地に広くみられるが、大通りのみならず裏小路に至るまで地域全体をおおい、その長さが計6,600メートル以上にも達した場所は銀座をにおいて他にないという²⁹。

こうして、個別の建物の西洋化ではなく、街全体が、統一された様式（ジョージアン様式³⁰）で西洋化された都市空間が、江戸から東京へとその名を変えた地に、早くも維新から10年後に出現したのである。一定規模での物理的な都市空間としての銀座煉瓦街は、西洋の様式というものを「文明」＝「近代」であると明治の指導者がみなすことによって計画され、建設された街であるがゆえに、明治初年の日本という文脈において「近代」の意味を運ぶ「メディア/記号」、「近代」の視覚的表象であった。空間人類学者の陣内秀信は、都市の一定の広がりをもった空間を西欧風に一気に作り替えることは容易なことではなかったが、外国人によって都市空間全体を西欧流に構想された例外として、銀座煉瓦街計画を挙げている³¹。そしてこのことが意味するのは次のことである。

居留地となっていた築地と世界の窓口・横浜と鉄道で繋がった新橋に隣接する銀座は、たしかに、そのことによって「文明」の表玄関となっはいたが³²、ジョージアン様式で統一された都市空間は、それまでの日本、そして銀座の生活様式にけっして根ざしたものではない。銀座周辺が起工のわずか半年前に火事によって灰燼と化したことを絶好の機会ととらえ³³、国家の指導者自らの近代性への執着を宣言せんがために出現させた空間。空間全体を西欧風に構想され銀座煉瓦街。それは、文字通り、イギリスから日本の江戸という土壤に移植された「近代」であった。本稿で銀座煉瓦街をとりあげる理由もそこにある。完成当初の評判は芳しいものではなかった銀座煉瓦街は、やがて江戸から東京への変化を象徴する成果をあげていったとされている³⁴。この変化は、「近世から近代への変化」と理解してよいだろう。

では、関東大震災（1923年）で壊滅することになった銀座煉瓦街がその間どのような「近代」

²⁹ 藤森 前掲書、37頁

³⁰ ギリシア・ローマにその源泉をもつ古典主義系の建築様式で、18世紀末のジョージ王朝期に、産業革命の申し子として生まれている。大英帝国の版図に沿って各地に広まり、植民地様式として開花した。藤森 前掲書、34-35頁

³¹ 陣内秀信『東京の空間人類学』ちくま学芸文庫、1992/2019年、204-205頁

³² 藤森 前掲書、3-4頁

³³ 藤森によれば、大火後三日で煉瓦街建設の方針は決まったという。同上書、220頁

³⁴ 日埜 前掲書、52頁

を示したのであろうか。ここからの関心は、銀座煉瓦街として表象された「近代」がその空間のなかでどのように作動していったのか、である。

銀座煉瓦街とハイブリッドモダン

当初は失敗と評されていた銀座煉瓦街が1887年から坂を登りはじめたのはなぜかと藤森は問う。商品経済の発達というだけでは、日本橋の衰退という事実からして説明がつかない。この問いに対して藤森が着目したのは銀座煉瓦街のあり方であった。では、そのことによって見えてきたものとは何か。

藤森は銀座隆盛の理由として、1) 新商品、2) 街路、3) 店構え、4) 宣伝の力の四つを挙げているが、ここでは1) から3) についてさらに述べることにする。

第一の理由に挙げられている新商品とは、牛肉、ビールなどの洋食品、洋服、家具といった舶来品、時計などの工業製品、洋食店や床屋などのサービスなどである。このとき、藤森はこれら新商品を「洋風の街」とのセットでとらえることを忘れない。洋風の街では足袋ではなく洋服だと。第二の街路では、買い物に適した歩道、並木、歩廊、ガス灯といった街路空間に言及している。歩道は馬車などの往来物から婦女子を守り、ぬかるみから客足を救う。並木と歩廊は、日傘と雨傘となり、ガス灯は閉店を日没以降に延ばすのである。第三の理由に挙げる店構えとは、それまで一般的であった座売りとは異にした立ち売り形式の店内のしつらえ、高級品を店頭に出すショーウィンドーの出現といった商い慣習への変化を指している³⁵。

かくして銀座はそれまでの江戸にはない新しい商業空間として人々を引き寄せていくことになるのである。しかし、だからといって、この空間は何から何まで「西洋近代」であったのではない。また、人々がそこで演じたのも「西洋近代」ではなかった。藤森は、「洋の向こうに和が覗き、和の中から洋が浮かび上がる」との言葉でこの空間の特異性を表現したうえで、銀座は日本と西洋があやしく混ざり合った、ロンドンにも江戸にもない摩訶不思議な空間で、たとえば外国人にとっては不快な摩擦音が耳障りな街であったとしても、明治の人々はそのまま一つの新たらしい世界として受け容れていたと記述している³⁶。ここにおいて藤森は和洋混合の空間の出現を必ずしも否定的にとらえてはいない。計画外の「混合」を肯定的に見てさえいるのである。そして彼はこの銀座煉瓦街を舞台と見立て、「この舞台の開幕により、文明開化というものは目に一丁字なくともわかるようになり、人々は街を往くだけで陽気な開化の役者に仕上がった」³⁷と、この空間が生み出すエネルギーを高く評価しているのである。

³⁵ 藤森 前掲書、44-48頁

³⁶ 同上書、49-50頁。ここで藤森が日本と西洋の混ざり合った例として記述しているのは、煉瓦の軒先に舞う暖簾やトスカナ式の列柱の向こうで湯気を立てている長火鉢の様子などである。

³⁷ 同上書、51-52頁

このような銀座煉瓦街が呈した様相は「ハイブリッドモダン」という用語でとらえることができるだろう。ハイブリッドモダンとはモダンが「空間的な移転あるいは文化的伝播によって蒙るモダンの変質・変容」をあらわすものとして、厚東洋輔によって命名された用語である³⁸。すでに触れたように、銀座煉瓦街は都市空間全体を西欧流にするとの構想のもとに実現されたもので、いわば、物理的な意味での「西欧＝近代」の大規模な移転であった。「半開」という劣等意識をもつ指導者たちによって「半開」を開化させんがために、「文明国」イギリス産のモダニティの「半開」の日本である「江戸」という土壌への移植。それが銀座煉瓦街なのである。しかし、実際にそこで展開された光景は、和と洋が混ざり合った、ロンドンでも江戸でもない摩訶不思議なものだったという藤森の記述は、モダンが変容したハイブリッドモダンと呼びうる一つの新しい世界が銀座の地に出現していたことを示すものである。それは、おそらく、計画当初には予想できなかった、モダンが土着と接触することによってもたらされた様相と言えよう。明治の人々はこの新しい世界をそのまま受容し、これを開化の舞台として陽気に開化の役者を演じたと藤森は描いているが、そのことはまさしく厚藤が言う、「モダンを手なづけ、「混成」とでも呼びうるひとつのまとまりを持った「作品」へと自己の社会を転形」³⁹したかたちとして理解できるのではないか。「文明開化最大の作品は、銀座の煉瓦街」⁴⁰との藤森の一文は、この意味においてなのである。

さらに言及しなければならないのは、藤森によって1番目に挙げられた銀座隆盛の理由である新商品についてである。そこでは、煉瓦街で売られるに相応しい新商品＝「モダン」「文明開化」が展開されていたという。ふたたび厚東を引用しよう。「モダンを導入し、ハイブリッドモダンへの歩みが始まるには、モダンは光り輝く存在として土着の人々を魅了する必要」があるのだ⁴¹。このとき、西洋発の新商品はモダンを移転するメディアと化するのであった。これまでに述べたことを繰り返すことになるが、人は媒介物なしにはその世界に入っていくことはできないのであり、厚東が言うように、モダンは光り輝くものとして土着の人々を魅了することなくしては新しい地に入っていくことはできない。モノを介して新しい世界に入っていくモダンは、土着の人々によるモノへのかかわりを通じて、その地で土着の文化との相互作用によってさまざまなハイブリッドモダンを形成していく。銀座に新しい商品がなければ人々はそこを訪れようとはしなかったであろうし、新しい街路、店構えのなかに身をおくこともなかったであろう。それは、外形的な「事物」を通じることで初めて、人々は「文明開化」＝「モダニティ」に触れたことを意味する。銀座の地で目にすることとなった時計や洋服、煉瓦の連屋、歩

³⁸ 厚東 前掲書、27頁

³⁹ 同上書、29頁

⁴⁰ 藤森 前掲書、52頁

⁴¹ 厚東 前掲書、33頁

廊、ガス灯りは明治の人々にとって光り輝く存在であったことは想像するにたたくない。煉瓦街も同様で、完工なって払い下げ後に人がそこに入居してはじめて土着との接触が始まったのである。また、「モダニティ」の側からすれば、自身が準備した光り輝く「事物」を介することで、土着（人々）と接触できたということになる。

こうして銀座煉瓦街は「モダニティ」と土着の二人三脚でつくりあげたひとつの「作品」としてのハイブリッドモダンな空間を明治の日本に浮かび上がらせたのである。ここで出現したハイブリッドモダンが、移転された「モダニティ」と土着それぞれのどういった部分の「分子的作用」によって形成されたのか、その全容を解明することは困難であるが、人々はその場所で「文明開化」を演じることで環境化した「文明開化」を実感できたと言える。あるいはこうも言えるのかもしれない。人々は銀座での経験をもとに自分たちの「文明開化」を自身で環境化していった。

おわりに

明治の指導者らが主張した欧米列強に対するための「文明化」は、別言すれば「モダニティ」を日本の地に呼び込むことであった。それはまた、「新しいもの＝近代性」によって「古いもの＝封建性」を駆逐しようとする過程でもあったのである。かれらはその目的のために精力的に「文明国のあかし」となるものを採用していった訳であるが、本稿で扱った都市空間の欧風化の試みもその一端であった。しかし、「対外」政策としてそれが功を奏したかと考えると必ずしも首肯できないところである。たとえば、1878年に日本を訪れたI・バードは東京の洋風建築物を「ひどく悪趣味で、いやになるほど醜い」と酷評しているように、この時期の日本における風俗面での欧風化は当の文明国の人には必ずしも好印象を与えていないと言える⁴²。

だが、西洋人の目には「ちぐはぐ」で「悪趣味」と映った明治初期の都市空間ではあるが、銀座煉瓦街に引きつけて語るなら、当時の人々はそれを一つの新しい世界として受容していったのである。この新しい世界は、「モダニティ」の移転によって引き起こされた予期せぬ外形面でのハイブリッドモダンな空間であった。この「近代」と「土着」の邂逅によって出現したハイブリッドモダンな空間は、日本のその後の近代化の進行によってその「土着性」が削ぎ落とされ「モダンな空間」へと変貌したのであろうか。いや、そうではないであろう。このハイブリッドモダンな空間は現在の日本にも依然として存在し続けているのである。作家の中森明夫は1980年代の夜明けに沢田研二が歌ったTOKIOに関連して次のように書いている。

⁴² イザベラ・バード（時岡敬子訳）『イザベラ・バードの日本紀行』講談社学術文庫、2008/2011年、62-63頁。同様の外国人の感想は、藤森も取り上げている。藤森 前掲書、50頁を参照のこと。

TOKIO…外国語なまりの東京…日本人から見ても外国人から見てもストレンジな都市
…この世のどこにも存在しないイメージの都市…人々の視線の交錯する先に浮かび上がる
幻のホログラフ・シティ…⁴³。

明治の銀座煉瓦街という都市空間に浮かびあがったロンドンでも江戸でもない摩訶不思議な世界は、「近代」の「江戸（土着）」への移転の先に人々がみた万華鏡の中のような光景だと言えないだろうか。いま日本を訪れる外国人が口にする「東京の不思議な魅力」は、この万華鏡の世界のような、ハイブリッドモダンを環境として人々が生活していることにあるように思われる。

⁴³ 中森明夫『東京トンガリキッズ』JICC、1987年、179頁